

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 東アフリカより帰国して：ナイロビ駐在員の半年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008395">http://hdl.handle.net/10502/00008395</a>

## 東アフリカより帰国して

—ナイロビ駐在員の半年—

和田 正 平\*

### はじめに

わたくしが日本学術振興会の第4次ナイロビ駐在員としてアフリカの土を踏んだのは、街中に赤いブーゲンビリアが満々と咲き乱れ、ジャカランダの淡い花びらが赤土の地面を紫の花模様にもめはじめた乾季もおわりに近い昨年(1968)9月24日のことであった。

駐在員は、毎年きまって東アフリカの雨季にむけて派遣されてきたが、わたくしは出発の時期をいくぶん早めにしたため、晴れあがった快適なおお空と、花につつまれたナイロビの街が待っていたのである。

はじめてナイロビを訪れる人々は空港から都心にむかうにつれ、タクシーの中から見える近代的なビルディングと整然とした街並みに一驚するのであるが、それにもまして色とりどりの美しい花壇や街路樹には賛嘆の声を惜しまないのである。もちろん、それらのモダンな景観もイギリス植民地支配の繁栄の上にもぎずかれた遺産ではあるが、しかし、ゆきずりの人々の目には過去のいまわしい歴史をふりかえる余裕もなく、ただ、整然とした都市美のみ感激するわけである。

かってわたくしは、1964年9月から1966年10月まで、京都大学類人猿学術調査隊としてタンザニアに滞在した際、この都市を通過する機会が何度かあったが、すでにアフリカ大地を知ったものにとってはこの気どったよそゆきのナイロビの街には、正直にいってあまり好感をもてなかった。しかしながら、花の季節だけはたとえ英国人の伝統と体臭のしみついた郊外の公園であっても、ここを散策することは、わたくしの楽しみのひとつであった。それは、自然が文句なく美しかったからである。

3年ぶりに懐かしいナイロビ空港に降り立ったわたくしは、時間をとびこえてすでにアフリカ的自然の中に没入していたのである。

### 研究センターの開設

さて、ナイロビ駐在員制度ができたのは1965年と記憶している。最初に派遣されたのは富田浩造氏(当時、東外大A・A研、現在海外技術協力事業団在タンザニア)

であり、以後、石毛直道氏(京大人文研)大森元吉氏(広島大)と続き、わたくしに引き継がれたわけである。

いうまでもないが、近年、日本人によるアフリカ研究がいよいよ盛んになり、アフリカの原地において、本格的なフィールド・ワークにとりくむ者が着実に増加しつつある今日、もはや大使館からの直接的な援助をたのむわけにはいかず、現地に恒久的な研究センターを設立することは、本当にアフリカ研究者の間における強い要望であった。事実、かって京都大学アフリカ学術調査隊のメンバーの1人として、タンザニアのハンナン山麓でフィールド・ワークに従事していたわたくしは、前任の駐在員の協力によって円滑に調査を続行することができたし、九死に一生を得るといふ経験もしたことがある。

こんどは、逆にわたくしが協力しなければならない立場に立ったが、前任者の言をかりれば、ナイロビ駐在員は他の地域の駐在員(たとえばテヘラン駐在員など)と異なり、6か月という短い滞在日数しか持たないため、駐在活動と自己の研究調査とをうまくかみ合わせ、両者を並行して行なうことがむずかしく、これを調整するため特に綿密な行動計画をたてなければならなかったといわれている。

ところで、駐在員にあたえられた条件のきびしさは私の場合もまったく変りなかったが、たとえ、時期をみてタンザニアの自己のフィールドに入るにしても、まず、ナイロビに研究センターを開設するのが駐在員としてしなければならない最初の仕事であろう。そこで、わたくしは都心に近いギロウアード・ロードの一角にある英国人の家の一部屋を借りあげ、これを事務所と兼用した。ここには、余分な宿泊施設はないが、電話も直通で利用できる便宜があり、事務机や書棚などを設備することによってまず申し分のないオフィスとしての環境を整えることができた。10月1日、ナイロビ駐在員活動はここから出発することになったのである。

### 事業内容

オフィスが開設されたなら、さっそく活動しなければならぬが、以前の経験をいかすにしても3年間の空白があり、在ケニア大使館、および在留日本人の協力が必要である。幸いにも、大使をはじめ館員はこのセンター

\* 帯広畜産大学助教授(畜産学部)

の意義を充分理解してくれたので、いわば、準館員なみの待遇で便宜をはかってくれた。お陰でわずかに数週間うちにナイロビに予期以上の知己を得ることができたが、その中でも林晃史氏（アジア経済研究所）は、アフリカ研究者の1人でもあり、駐在活動に最初から全面的な援助と協力を約束してくれたので、わたくしは、なかばあらかじめいた個人研究の時間を行動計画のなかに、かなり余裕をもってもちこむことができたのである。

ところで、ナイロビ研究センターの事業内容であるが、これはまだ正式にフォームができていないわけではなく、おおかた派遣された駐在員の才覚にまかせられてきた。しかし、このオフィスが日本とアフリカの原地をむすぶ中継基地として、いわば日本のアフリカ研究を推進するための学問上の橋頭堡にしたい、という現在の学会の基本的な考え方にしたがうならば、おのずから、駐在員のとるべき姿勢もきまってくるわけである。ただ、ある場合には、それが、純粋な研究活動を制約することにもなってくるが、日本における研究室の雑用の質と量を想起すればかならずしも問題ではなくなるといえる。

そこでわたくしは、第4次ナイロビ駐在員の事業および研究として、基本的な項目をいくつかたてて実行することにした。

(1) 日本から派遣されたアフリカ学術調査隊および研究者に対する全面的協力。

(2) また、これに使用されるフィールド・ワーカーのため、調査用具、調査器具、装備の一部をデポし、借出する。

(3) アフリカに関する文献、地図、統計、新聞、定期刊行物などの資料を収集し、利用に供する。

(4) マケレレ大学、グレサラム大学、ナイロビ大学を訪問し、アフリカ研究の状況、また研究者の最近の動向を紹介する。

(5) 奥地においてフィールド・ワークに従事している研究者を原地に訪問し、紹介する。

(6) 日本万国博世界民俗資料調査収集団への協力。

(7) アフリカ部族言語文化調査表の完成。

(8) タンザニア、ハナン山麓における民族学的補足調査。

(9) 学会およびアフリカ研究者への通信、依頼調査事項に関する解答。

(10) 日本学術振興会への定期的事務連絡。以上、駐在員の活動が、これだけの項目を実行にうつすだけで、かならずしも、すべてが満足されたとも思わないし、またわたくしの力不足からいつも円滑に進行したわけでもない。しかし、たとえへボ基でも布石をしなければ、すべてがはじまらなかったのである。

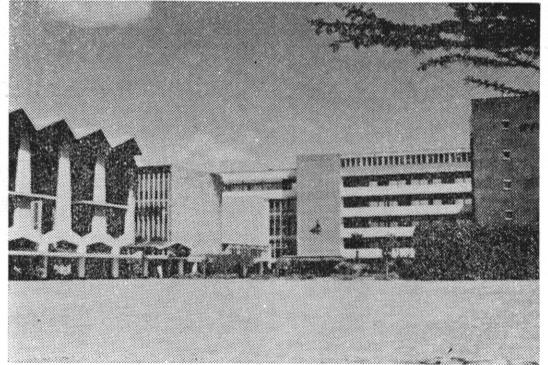


写真1 ナイロビ University College, 左手が図書館, 前方にあるのは社会科学関係の建物。

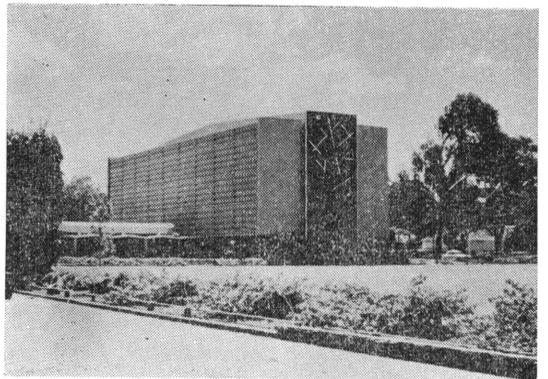


写真2 理学部

### 東アフリカの3大学

ここで、東アフリカの各大学について多少ふれたい。現在はケニア、ウガンダ、タンザニア3国にそれぞれ大学があり、各国独自の教育政策によって総合大学へ発達しつつあるが、1955年まで東アフリカにはイギリス本国と直結したマケレレ大学（ウガンダ）しか存在しなかった。大学はあくまで植民地支配の一環であったため、自由な発展は認められなかったのである。

しかし、東アフリカ3国がつぎつぎと独立するにつれ、ケニアとタンザニアに大学創設の気運がたかまり、それは、最初東アフリカ総合大学の結成となって実現した。すなわち、最も充実しているマケレレ大学を中心に、法学部を創設したグレサラム大学（タンザニア）、理工学部に特色をもたせたナイロビ大学（ケニア）がこれに加わり、東アフリカ総合大学として統一され、学位もロンドン大学の権威をたのみず、独自に授与することになったのである。しかしながら、このような1国1大学の実現は大学が充実してくるにつれ、学部増設のつよい要求となってあらわれてくるのが当然であり、総合大学化の構想へ発展してきたのである。最も出発の遅れた

ダレサラーム大学も政府の積極的な教育投資と欧米諸国の財政援助を受けて、今では法学部、文学部、社会科学部、理学部をもつ総合大学へ成長したのである。

さて、10月15～16日の両日、わたくしは、インド洋に面した小高い丘の上にあるダレサラーム大学を訪問した。そこで思いがけず、P. Puritt 夫妻に逢ったのである。彼はカナダからきた人類学者で、かつて、わたくしがタンザニアでイラク族の調査を続行していたとき、アルシャの街で一緒になり、互にアフリカにおいて現に起りつつある人類学上の問題について意見を交換したことがあった。今はこの大学に籍を置いて研究するかたわら、なおメル族の調査を継続しているとのことであり、Ph. D の学位を得るため論文を準備中であつた。かつてタンザニアで親交のあつた人類学者は、彼をのぞいては皆本国の大学に教授の地位を得てもどつてしまい、会うことはできなかったが、この大学の Research Associates の資格において、フィールドへ入っている新進の研究者を紹介され、最近のアフリカ研究者の動向に関して新しい情報をえることができたのである。

ナイロビ大学では、Institute for Development Studies の Cultural Division を訪問し、A. H. Jacobs に会見した。現在、彼は農耕化したマサイ族の文化変容の研究に着手しているが、同時に、研究所の Research Director として、ロックフェラー財団の基金により、現在2年計画で実施されている“Kenya Traditional Material Culture Project”および“Kenya Belief Systems project”の2つの研究テーマの実質的な推進者であつた。わたくしは、日本から持参した“アフリカ社会の研究”（今西錦司、梅棹忠夫編、西村書店）をかれに手渡したが、立派な装釘に、アメリカ人特有の大きな動作で驚嘆の声をあげたが、このユーモラスな実力者は初対面であるにもかかわらず、調査研究の全面的な協力を彼のほうから求めてきたのである。新興のアフリカの大学は最早外国人の興味によって与えられた研究課題ではなく、直面している現代的な問題に意欲的にとり組みはじめたといえるのである。

### ウガンダ旅行

これまでタンザニアに研究地域が集中していたため、ウガンダを見る機会がなかったが、古くからブガンダ、アンコーレ、ブンニョロ、トロの4王国の栄えたこの地を訪問することは、わたくしのかねてからの念願であつたし、また、日本の先輩からマケレレ大学の2,3の教授を紹介されていたので、ぜひ訪問しなければならないと思つていた。

12月6日、万博から派遣された民俗文化資料調査収

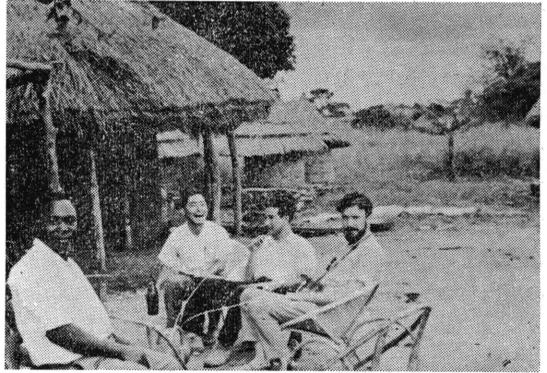


写真3 ウガンダのテソ族の部落にて、左から Prof. P. Rigby, 私, 長島信弘氏。

集団の片寄俊秀氏の日程にあわせて、カムバラにむけて出発した。今回の資料収集には、ウガンダ東部の大部族、テソの人類学的調査に従事している長島信弘氏も協力員として名をつらねていたので、わたくしたちは前もってかれに連絡をとり、カムバラのグランドホテルで落ち合うことにした。本来なら、フィールドにある者を調査外の仕事にわずらわすことは極力さけるべきであるが、物質文化にも興味をもっているかれは、この機会に、ウガンダ西部を旅行したいというわたくしの計画に賛意を示したので、3人頭をよせて計画をたてることになった。ところがちょうどこの時、マケレレ大学、社会学担当教授 P. Rigby が長島氏のフィールドを訪問することになったため、まず、テソの彼の調査地に同行することから、ウガンダにおける民俗文化収集旅行がはじまったのである。

テソ族は、今世紀はじめの古い記録写真をみると全裸に近いかっこうをしているが、今では、東アフリカでもっとも西歐化が進んでいる部族のひとつであり、クリスチャンが多く、教育熱心で有名である。換金作物として綿花の栽培が盛んであり、アワ、ヒエを主食としているが、牧畜民としての古い文化は失いつつあり、畜牛飼養頭数もしだいに減少しつつある。ここで、わたくしたちはカメに入った地酒を御馳走になったが、これをのむためには長いストローで酒をすわねばならず、自分がどれだけのんだのか見当もつかないが、味は確かに教授のいうように「Excellent」であり、伝統的に洗練されたかれらの文化を反映していた。しかし、われわれのこの感激をよそに、隣でビールを楽しんでいるテソの老人を見ると、やがて完全に亡びゆくこの部族の文化を象徴しているようで、それが文化の宿命だとは知っていながら、なぜか人類学者に特有な愛惜の情がこみあげてきてしかなかった。

さて、わたくしたちはテソやカラマジョング（ウガン

ダの好戦的な牧畜民)の物質文化を収集した後、ウガンダ西部へ出発した。雨季の自動車旅行はアフリカではもっとも危険に満ちており、生命の保障はないとおどかさもののさえるが、わたくしは充分経験済みなので、無理はしないが、1日約250マイル平均の行程という計算でアンコール王国へむかったのである。激しい雨はしばしばわれわれを悩まし、躊躇させたが、コンゴとの国境にあるルエンゾリ山系をのぞむ丘にたった時、この幻の月の山がかすかにみえるほど空は晴れあがっていた。途中クイン・エリザベス国立公園を通過して Fort Portal に到着した日は、西北部のアチヨリ族の領域まで入りたいという欲も出たが、収集品もかなりの量に達したので、断念し、一路カンバラへの道を急いだのである。

わたくしはこの旅行中、しばしばタンザニアの自己のフィールドと比較して眺めるくせが出てしまったが、この稔り豊かな国が、また東アフリカにおけるはかり知れない部族文化の溜まりをひたかくしにかくしているようで、行きかう老人がすべて呪術者にみえてきてしかたなかった。

### イラク族調査

正月、わたくしは京都大学ハナン基地で過ごすことになっていた。イラク族の友人たちは、この日本の祭日に今ではほとんど作ることがなくなった伝統的なハチ密酒を、わたくしに御馳走したいと計画をたてていたのである。しかしわたくしが部落を訪問したとき、かれらは2年続いた天災によって主食のトウモロコシがほとんど収穫がなく、飢餓状態におちいていた。幸い、農耕と牧畜をたくみに融合した生産様式をもつイラク族は、牛市で家畜を売却して現金を手に入れることはできた。

そこでかれらはふところにした現金をにぎりしめて、100マイルほど離れた農耕部族イランギの部落まではる出かけて行き、トウモロコシを買いあさり、持って帰ってようやく一家の飢をしのいでいたのである。

わたくしのキャンプの前は、1日に何度かこのような食料買い出しに出発するロバのキャラバンが通りすぎて行った。長老たちは、連日部落の広場に集って合会を開き、食料を確保する方策について頭をよせて論議していたが、豊作の年には、自分たちが石油缶1杯4シル(200円)でコーポラティブに売っていたトウモロコシが、一旦飢饉に陥り、政府の正式ルートを通してそれが効済物資としてかれらの目の前にもどってきた時、9シル(450円)にも値がはねあがるという経済のカラクリは理解できず、矛盾としかうづらなかつたようである。

さて、わたくしはここに約40日間滞在したが、インホームナのなかには、子供たちがつきつぎと家を見捨て

て逃亡し、家族が崩壊しかかっているものさえあり、調査を開始することに抵抗を感じないわけにはいかなかった。

調査はイラク言語文化調査表の完成と雨乞儀礼をめぐる地縁構造の分析に焦点をしばつたが、ところが部落の困窮とはまったく別な次元で調査が頓挫してしまつた。もちろん、調査にはいつも予期せぬ事態が発生したり、どこか準備に欠陥があつたりして、いざとなつてあわてることがおうおうにしてあるが、こんども携帯用テーブコーダーが録音中に故障し、せっかく集つてもらったイラク族の長老たちをすっかり失望させてしまった。日本から大切に抱きかかえてきたテーブコーダーだけにわたくしもあきらめきれず、モーターの回転むらをドライバー1本でふせぎながら、ようやく2000語を録音することができたのである。

また、雨乞儀礼はイラク族のあいだでよく発達しており、E. H. Winter の精緻な報告がでているが、ハナン山麓一円のイラク族は隣接するゴロワ族の雨乞師のところにおいて毎年この儀礼を行なっており、ここに見られる雨乞をめぐる超部族的な地縁関係にわたくしは興味をもつたわけである。しかし、滞り期間中ゴロワ族の大雨水乞師は酒席の場で傷害事件を起こし、警察の追跡をのがれてゴロワ族の部落から身をかくしたので、ついに雨乞儀礼を観察する機会を失い、単なる聞き込み調査に終つたのはかえすがえすも残念であった。

調査地に別れを告げる日が近づくにつれ、協力者に再会を約したが、今年は順調に降雨がありそうなので、こんどわたくしがハナン山にやってきた時には、食料の心配はさせないと断言する底抜けに明かるいかれらの顔を見ていると、わたくしもかれらの神、ロアの天恵を祈りたい気持ちでいっぱいであった。

### 駐在員活動の限界

イラク族の調査からナイロビへ帰ってきて、若干の資料整理をしているうちに、帰国期限がずんずんせまってきた。6か月のナイロビ滞在は計画のたて方によっては有意義にもなり、センターの設立は、今後のアフリカ研究において果たす役割はきわめて大きい、しかし、やはり、半年は短期間にすぎず本格的に仕事に専念する時間的な余裕はなく、野外調査の規模は縮小せざるをえなかつた。

帰国にあたって、わたくしはケニア、ウガンダ、タンザニアにおいて収集した資料や装備や物品を引継ぐものがなく、やむなく梱包して大使館に保管を依頼することにしたが、ここに、どうしようもない駐在員活動の限界があることを実感した。それは、出発にあたって充分承

知っていたことではあるが、ナイロビ滞在中に協力してくれた原地の友人、知己を後任者に直接紹介することもできず、つぎの駐在員はまた、おなじ時間と労力をかけて貸事務所や宿舎を探したり、不案内な土地で新しく情報を集めたりしなくてはならず、毎年、このようなセンター設立をくりかえしては前任者の努力が無駄になるばかりでなく、アフリカ研究センターの信用にもかかわるかもしれない。駐在期間は少なくとも1年間に延長される必要があり、ジープをもたなければ、満足な研究活動ができないことを強調しておきたい。こと野外調査にかぎらず、アフリカでは、車がなければ行動の自由を完全に放棄しなければならぬ境遇にたつのである。すべての要求を一度に実現させることはむずかしいことは了解できるが、この2点は、原地に駐在したものの切実な願いであった。

おわりに

わたくしの東アフリカ滞在中は、日本においては安田講堂の落城を頂点に、大学紛争のもっとも激化した時期であり、大使館に1週間遅れて送付されてくる日本からの新聞を読むたびに、遠隔地にて無責任な発言は許されないと知りながらも、大学の同僚にペンを握ってい

ることが多かった。

大学紛争は東アフリカの大学においても例外ではなく、授業放棄やストライキというかたちでしばしば発生していたが、日本のように大学の根本をゆるがすような運動としては発展していない。一般に、政府の言論弾圧に対する反対が学生運動の中心的テーマのようにみうけられたが、ダレサラーム大学のように、卒業後の国家奉仕に対する不満が学生のあいだに充満しており、ボイコット運動に発展しそうな形勢のところもある。しかし総じてこうした発展途上国の大学は、まだ、大学建設という幸福な時代にあり、学園はエリートとしてかがやかしい進路が約束されている学生のおつまりであり、政治論争には熱中するが、しかし、警察官に護衛された大統領の祝辞がなければ卒業式のはじまらないという、日本からみれば夢のような大学なのである。かれらには体制批判にとどまらず、教師を否定し、学園を破壊する日本の大学紛争はまったく理解できないようであった。わたくしは、ケニアを去る前日、再度ナイロビ大学を訪問したが、学生とは話し合う機会もなく、Jacomb 教授にだけ帰国のあいさつをすませ、昼下りの学園をあとにしたのであった。

学協会会合開催予定表 (1969年9・10月)

日本学術会議調査課

開催月日	会合名	会場	参加人員	主要テーマ	連絡先
9月1~3	<理学関係> 第14回日本人類遺伝学会	北海道大学理学部	500	シンポジウム人類細胞遺伝学	日本人類遺伝学会 文京区湯島1-5 東京医歯大人類遺伝学研 (813) 6111 内453
9月下旬~10月上旬	日本植物学会第34回大会	東京都立大学	500	植物学全般	日本植物学会 文京区本郷7-3-1 東大理 (812) 2111 内6452
10月未定	<人文関係> 日本近世文学会秋季大会	広島	未定	未定	日本近世文学会 渋谷区東1-1-11 (409) 1771
1~2	<医学関係> 第16回日本矯正医学学会総会	東京東条会館	300~400	未定	日本矯正医学会 千代田区霞が関1-1 法務省別館 (580) 4111 内2406
4	第31回日本血液学会総会	京都府会館		特別講演 無菌動物の血液学他数題	日本血液学会 左京区聖護院川原町53 (771) 8111 内5712
22~23	日本脳波学会総会 (第13回)	大阪厚生年金会館	1,000	未定	日本脳波学会 文京区本郷7-3-1 (812) 2111 内3447